

第4章

2010年のシンガポール情勢 ——戦略的不確実性の渦中における革新と自信

ラム・ペン・ア

アジアと世界におけるパワーシフト

シンガポールと世界は今、世界の政治経済におけるパワーシフトを目撃している。第一に、東アジアは西洋に比べ、世界的な金融危機を上手く切り抜けてきた。第二に、中国は2010年にGDPで日本を抜き、さらに2019年までに米国をも追い越す可能性が十分にある¹。このパワーシフトに加え、シンガポールは非伝統的安全保障問題、例えばマラッカ海峡やアデン湾の海上交通路の安全、近隣諸国やアフガニスタンにおけるテロリズムといった問題にも対処しなければならない。

2010年にシンガポールで開かれたシャングリラ・ダイアログ（アジア安全保障会議）の席上、テオ・チー・ヒン国防相は次のように述べた。

「中国やインドなどアジアの経済大国は、米国あるいは欧州よりかなり速いペースで成長を続けており、また世界的金融危機を比較的上手く切り抜け、先進諸国が不況に陥ったのに対し、プラス成長を維持してきた。世界の経済的重要性のバランスは20世紀最後の10年間でアジアへシフトし始め、それは明らかに、金融危機によって加速された。（中略）アジアの大国、特に中国とインドの戦略的重要性も高まってきた。経済的重要性のバランスがシフトすれば、地理戦略的重要性のバランスもシフトする。そうした地理戦略的シフトは必然的に、戦略的不確実性をもたらす。そこで問われるのは、新興大国が経済面と安全保障面で増大する国益を保護すべく自己主張し、既存の大国、そして地域

¹ “When will China overtake America?”, *The Economist*, 18-31 December 2010, p.137.

秩序の安定に対し難題をもたらすことになるか否かである」²。

シンガポールの安全保障に対して多様な課題が突き付けられているが、この都市国家は革新と静かなる自信を以て、それらに積極的に対処している。シンガポールは経済的に外的ショックの影響を受けやすいにも関わらず、2010年に約15%という最高の経済成長を謳歌した。経済回復と大幅な財務留保のおかげで、国防省（MOD）は十分に資金を得ることができた。2010会計年度のMOD予算配分は114億6,000万シンガポールドル（88億7,000万米ドル）で、前年とほぼ同額であった。

戦略的不確実性の渦中における存続と繁栄に向けたシンガポールの戦略の特徴として、ASEAN中心型地域構造の支持、合同軍事演習の実施を含む、全ての大国との良好な関係の維持、隣国との関係改善、人道的災害救援、マラッカ海峡やアデン湾における海賊対策及びアフガニスタンにおけるテロ対策といった国際貢献の実施、第三世代のデジタル・ネットワーク化されたシンガポール軍（SAF）の抑止力強化といった点があげられる。この都市国家の安全保障政策における際立った特徴は、革新のための技術力、そして独自の高度な兵器システムの部分的構築及び海外の訓練拠点における陸・空演習及び海・空の統合演習での試験によって物理的な空間不足を補う技術力である。これまでにSAFは米国、オーストラリア、ニュージーランド、インド、南アフリカ、ドイツをはじめとする国々の10箇所余りで演習を実施してきた。

ASEAN 中心型地域構造

テオ国防相は次のように指摘した「従って、戦略的流動の渦中であって、我々は直面する課題に対応すべく、アジア太平洋地域でどのような安全保障構造を進展すべきであろうか。現在のASEAN中心型地域構造は、この地域に上手く貢献してきた。（中略）長年にわたり、ASEANは安全保障や経済等々の問題に関して主要国を一堂に会する重要な役割を、たとえ一部の国々にとって二国

² Deputy Prime Minister and Minister for Defense Teo Chee Hean at the 6th Plenary Session on “Renewing the Regional Security Architecture”, Shangri-La Dialogue 2010.

2010年議会議定費委員会審議での演説にて、テオ国防相は次のように指摘した「米国は今後数十年間も引き続き経済面、軍事面、技術面で傑出すると見られる一方、世界の経済的重要性のバランスは東向きにシフトしてきた。アジアの大国、特に中国とインドの戦略的重要性は高まるであろう。両国は一層自信を強め、世界情勢及び地域情勢において一層重要な役割を果たすことを望むであろう」（MINDEF News, “Speech by Deputy Prime Minister and Minister for Defense Teo Chee Hean at the Committee of Supply Debate 2010”, 5 March 2010）。

間協議が不都合な場合でも果たしてきた。ASEAN 中心型フォーラム、例えば ASEAN 地域フォーラム（ARF）や東アジア首脳会議（EAS）などは、地域内の主要国が全て集結する場である。今後も ASEAN は地域安全保障構造の支点としての重要な役割を果たし続けるであろう。その要因は ASEAN が中立的であること、諮問機関であること、そしていつでも関与する用意があるという点にある」³。

おそらく、シンガポールと ASEAN は台頭してきた中国の影響力とバランスを取るべく、米国、ロシア、インドを EAS へ引き込んだ。2010 年 5 月、ASEAN は拡大 ASEAN 国防相会議（ADMM プラス）を ASEAN プラス 8 の形で確立した。ASEAN に加え、この新たな枠組みにはオーストラリア、中国、インド、日本、ニュージーランド、韓国、ロシア、米国が含まれる。その意図は、多国間で信頼を構築し協力するネットワークへ大国と地域の関係国を巻き込むことにある。

外交及び協力——隣国

シンガポールが 1965 年に辛くもマレーシアから分離独立して以来ずっと、両国の関係は刺々しくなることが多かった。争点として例えばシンガポールへの水の販売（これは国際条約により正式に規定されている）やシンガポール国内のマレーシア鉄道用地などが挙げられる。ほぼ間違いなく、シンガポールへの給水が一方的に遮断されればそれは開戦理由となる。2010 年までに、マレーシアとの関係は大幅に改善した。新たな交渉を経て、マレーシアはマレーシア鉄道用地をシンガポールへ返還し、代わりにシンガポール国内で同等の価値を持つ区画を獲得し、そして出入国管理・検疫施設を都心のタンジョン・パガーからシンガポール北端のマレーシア国境に面したウッドランズへ移転することに合意した。さらに、マレーシアは同年、シンガポールで最も危険なテロリストであり、この地域におけるアルカイダの連携組織であるジェマ・イスラミア幹部のマス・サラマットをシンガポールへ引き渡した。以前、マス・サラマットは嚴重警備の刑務所から脱獄し、大規模な搜索を尻目にマレーシアへ逃亡していた。彼は一時期潜伏していたが、後にマレーシアで逮捕された。

特に重要なのは 2010 年にマリナ・バラージが正式開業したことで、これは現在のシンガポールの水需要の 10% 余りを供給することになる。これはシンガポールで 15 番目の、ただし都心に初めて設けられた貯水施設である。シ

³ Ibid.

シンガポールは人口が徐々に増え、いずれおそらく 650 万人に達すると見られるが、脱塩化プラントなど手頃な新技術の活用や、島の大半を集水域へ転換することにより、水の自給自足達成に取り組んでいる。シンガポールは、マレーシアとの二国間論争において政治問題化する可能性がある水依存度の低減によって生存可能性が高まり、また両国間の争いの根幹も取り除かれるであろう。

シンガポールはインドネシアとの良好な関係を謳歌している。2 国間軍事演習に加え、SAF はインドネシアにおいて例えば 2004 年の津波の惨劇や 2009 年のスマトラ地震などの発生後、人道的災害救援活動も支援した。インドネシアは対海賊警備でシンガポールと連携する国の 1 つでもある。インドネシア、シンガポール、マレーシア、タイから成る沿岸諸国は共同で、マラッカ海峡及び周辺の海上・上空哨戒を実施している。

2009 年に創設されたシンガポール海軍情報融合センター（IFC）では、少なくとも 7 カ国から集まった国際連絡将校が共同で、海上での潜在的脅威の探知のほか、係る問題に適時かつより効果的に対応すべく取り組んでいる。シンガポール海軍は、西太平洋海軍シンポジウム・地域海洋情報交換やマラッカ海峡哨戒など、国際連絡将校を IFC に集結させるべく地域組織を招へいしてきた。

海外での SAF——アデン湾

シンガポール海軍はマラッカ海峡及びシンガポールの安全保障に重点を置く一方、アデン湾でも諸外国海軍と協力して海上交通路の安全確保に一役買っている⁴。2009 年 4 月から 7 月にかけて、シンガポールは戦車揚陸艦 1 隻とスーパー・プーマ・ヘリコプター 2 機を含む任務群を、多国籍の第 151 合同任務部隊（CTF 151）の枠組み内におけるアデン湾での対海賊作戦向けに展開した。2010 年 1 月から 4 月にかけて、SAF のコマンドチームが CTF 151 を先導した。このコマンドチームはシンガポール人 29 名に加えオーストラリア、フランス、ニュージーランド、韓国、サウジアラビアの各国海軍要員 6 名から成り、欧州連合、NATO 及びその他の国々の海軍と合同での対海賊作戦の調整にも当たった⁵。

⁴ Major Kwan Hon Chuong, "Piracy in the Gulf of Aden: Are there any lessons to be learnt from the Straits of Malacca and Singapore?", *Pointer: Journal of the Singapore Armed Forces*, Vol.36, No.2, 2010, pp.15-22.

⁵ MINDEF News, "Singapore completes Command of Multinational Counter-Piracy Task Force", 21 April 2010. "The RSN at the Helm of CTF 151 --- A Job Very Well Done", *Navy News*, Issue 2, 2010, も参照のこと

アデン湾内の海上交通路の安全保障に対するコミットメントとして、シンガポールは221名からなる第二次任務群に戦車揚陸艦1隻とスーパー・プーマ・ヘリコプター2機を2010年6月から10月にかけて配備し、さらに2010年12月から2011年2月にはフォッカー50海上哨戒機1機を配備した。シンガポールは2011年3月から6月にかけて、CTF 151の2度目の指揮要請を受諾した。また別に、戦車揚陸艦1隻とスーパー・プーマ・ヘリコプター2機を含む任務部隊が2011年後半にアデン湾へ再び配備される予定である⁶。

海外での SAF——アフガニスタン

シンガポールと東南アジアの地元で増殖したテロリストネットワークを依然警戒する一方、シンガポールは米国とNATOによるアフガニスタンでの対テロ活動の支援にもSAFを派遣した。アフガニスタンへのSAF派遣は、他の友好国の軍隊と協力して、困難な地形での本物の軍事作戦で技量を磨く機会にもなる。アフガニスタンにおけるシンガポールの貢献例として、タリンコウトでの対砲兵レーダー派遣、カブール市内の高射学校でのアフガン人部隊の訓練、オルズガン州への医療・外科チーム派遣、バーミヤン州での建設工学チームの活動、KC-135空中給油機1機と52-man無人航空機任務群のタリンコウトへの派遣、があげられる。

海外での SAF——高度ネットワーク化部隊としての訓練

第三世代の高度ネットワーク化部隊としての技量向上、そして都市国家における土地と空域の制約の克服を継続しつつ、SAFは困難を伴う不慣れで広大な地形での訓練を海外で継続した。注目に値するのは2010年9月から11月にかけて実施された「2010年ワラビー演習」で、豪クイーンズランド州のショールウォーター湾訓練エリアでの演習に5,200名が参加した。ショールウォーター湾地域は面積がシンガポールの4倍もあり、従ってSAFにとって貴重な訓練の場である。

これはシンガポールにとって史上最大級の海外軍事演習である。シンガポール国防省は「ワラビー演習」について「20年前の旅団レベルの演習からすると、最新版の演習は進化して数々の空と陸のプラットフォーム、例えばアパッ

⁶ MINDEF News, "302 SAF Personnel Honored for Counter-Piracy Efforts in the Gulf of Aden", 8 October 2010.

チ AH-64 ヘリコプター、F-16 戦闘機、バイオニクス II 歩兵戦闘車、レオバルト 2A4 戦車、シンガポール自走式榴弾砲プライマスなどが加わるようになった」と指摘した⁷。

5 カ国取極めに基づく訓練を含む、近隣諸国や諸外国との合同軍事訓練に加え、SAF は超大国の米国や大国の中国及びインドとの合同訓練にも参加している。これは全ての大国との良好な関係の維持という、シンガポールの大戦略に沿っている。2010 年 11 月、SAF の 170 名からなる部隊は米国オクラホマ州フォートシルにて、コードネーム “Daring Warrior” という高軌道砲兵ロケットシステム (HIMARS) 砲兵隊実弾射撃演習を実施した。2010 年 7 月に SAF へ初めて納入された HIMARS は 70 km 離れた標的を仕留め、最高時速 94 km で移動し、20 秒以内に「撃っては逃げ」て隊員と装備の生存性を確保することができる⁸。この演習には米国陸軍との合同実弾射撃訓練も含まれた⁹。

2009 年と 2010 年の 2 回、SAF は中国の人民解放軍 (PLA) と合同で対テロ演習を実施した。最初の演習は 2009 年 6 月、広西省桂林で実施された。2 回目はシンガポールのムライ都市訓練施設で実施された。SAF と PLA からそれぞれ 60 名の部隊が 9 日間の演習に参加し、この演習では化学兵器や爆発物の脅威への対応を含む対テロ作戦に重点を置いた。報道によると、2010 年の演習に参加した SAF 要員には SAF の化学・生物・放射線・爆発物防衛群、医務隊、憲兵団が含まれた。中国側からは PLA 本部、北京駐屯地及び北京軍司令部の要員に加え、化学防衛連隊も演習に参加した¹⁰。SAF 合同作戦部長のギエン・フーン・ピン准将は合同演習が「両国軍相互の理解と協力を向上させるための基盤を提供し」、さらに「今回のような相互交流は我々にとって将来、人道支援や災害救援など、必要が生じた時に協力する上で大いに役立つ」と指摘した¹¹。

シンガポールはインドで定期的に、インド陸・海・空軍と合同演習を実施してきた。2010 年 3 月、SAF とインド陸軍はインド中部のバビナ野外射撃場での年次合同武装演習、コードネーム “Bold Kurukshetra” に参加した。実弾

⁷ “Exercise Wallaby through the Ages”, *Pioneer*, January 2011.

『ストレーツ・タイムズ』紙は次のように報じた「空・陸統合作戦行動がワラビー演習の中心である。(中略) SAF の空・陸戦術統制センターは司令官が SAF の火力を集結させると共により迅速な判断を可能とすることによって、敵軍に先制攻撃を加えることができるよう、敵軍を発見、追尾した」(“Training abroad important for SAF”, *The Straits Times*, 20 November 2010)。

⁸ “SAF conducts live-firing test of latest artillery system”, *Channel News Asia*, 21 November 2010.

⁹ MINDEF News, “SAF Conducts HIMARS Live-Firing Exercise in the US”, 21 November 2010.

¹⁰ “SAF and Chinese army in joint exercise”, *The Straits Times*, 20 November 2010.

¹¹ MINDEF News, “SAF and PLA conclude COOPERATION 2010”, 24 November 2010.

射撃演習には SAF のバイオニクス戦闘車とブロンコ全地形対応車、インド陸軍の BMP-2 歩兵戦闘車と T-72 主力戦車が参加した¹²。シンガポール共和国空軍 (RSAF) とインド空軍 (IAF) も 2010 年 12 月、合同軍事演習をカライクンダ空軍基地で実施した。RSAF の F-16 C/D 戦闘機、RBS-70 射撃部隊及び PSTAR レーダーが同年、IAF の Mig-27 飛行中隊と合同訓練を実施した¹³。それに先立って 6 月、RSAF は初めて、フランスとインドの両国空軍と共にシンガポールからフランスのオランジュ空軍基地とイストル空軍基地までの 11,500 km をカバーする演習「ガルダ」に参加した¹⁴。

シンガポール海軍は 1994 年、インド海軍との合同対潜水艦戦演習を開始した。2010 年 4 月、シンガポール・インド年次合同海軍演習がアンダマン海とベンガル湾で実施された。シンガポール海軍はステルスフリゲートとミサイルコルベットをインド海軍との合同訓練に派遣し、演習の間にポートブレアとビジャカパトナムに寄港した。シンガポールは 2010 年 8 月、インドが主催し 12 カ国が参加した多国籍軍事作戦演習「ミラノ」にも参加した。

シンガポールの国防研究開発

小さな都市国家の軍隊が大国の米国、中国、インドを含む 12 カ国以上の一員として海外訓練に参加することは、非常に目覚ましいことである。もう 1 つの特徴として、前述の通り、SAF が陸・海・空軍の隔てなく行動する第三世代

¹² MINDEF News, "Minister of State for Defense Visits Bilateral Armor Exercise in India", 27 March 2010.

¹³ MINDEF News, "Singapore and Indian Air Forces Conduct Joint Military Training", 15 December 2010.

¹⁴ "20 Takes on 10 milestones", *Pioneer*, December 2010, p.9.

のデジタル・ネットワーク化軍隊への転換に向けた絶え間ない努力¹⁵、そして国防研究開発を実施し SAF 向けの兵器システムを開発するシンガポールの能力が挙げられる。これはシンガポールの国防予算の約 4% を研究開発に投じることで実現する。国内での開発成功例としてペガサス軽量榴弾砲、ブロンコ全地形対応輸送車、シンガポール海軍フリゲートの指揮・統制システムが挙げられる。

ハイテク研究開発の成功例は、シンガポールの無人航空機 (UAV) である。東アジアの軍隊で 21 世紀の戦場向けに独自の UAV 開発に成功した例はほとんどない。UAV に加え、シンガポールは海軍向けの水中監視・機雷対策用の無人潜水艇や陸軍向けの地上ロボットの開発も進めている。海軍司令官チャー・メン・レオン少将は次のように説明した「MCMV (掃海艦) に関して、我々は機雷の脅威に対処する無人技術の試験展開を可能にする新技術の導入に重点を置いている」¹⁶。

シンガポールの UAV 研究開発について詳しくは、テオ国防相の発言を引用すると役立つと思われる。テオ国防相は次のように指摘した「航空分野においては我々の研究開発活動も成果を上げてきた。DSO は約 10 年前に無人航空機の研究開発を開始した。これは陸軍大隊作戦の支援を主な任務とする、『スカイブレード』と名付けられた 1 人で運搬可能な小型戦術 UAV の開発に向けた取り組みである。この UAV は、直接観察では見えない『丘の向こう側』も含めた作戦区域のリアルタイムのビデオ画像を、大隊に提供してくれる」¹⁷。

¹⁵ 空軍司令官ゲー・チャー・メン少将は「空軍が第三世代 RSAF へと進化できるよう、我々は技術を重要な戦力増要素として期待している。例えば、ガルフストリーム 550 空中早期警戒 (G550-AEW) 機は、高度な監視能力と高い空中耐久性を活かして、ネットワーク化された防空強化に貢献するであろう。より長期的に見ると、G550-AEW は RSAF と SAF 向けの統合型ナレッジベース指揮・統制 (IKC2) 能力の開発にも一役買うであろう。F-15 SG は我が軍の最も高度な戦闘機で、高度な技術と最新鋭のミッションシステムを備えている。我が軍の F-16 や F-5 と共に、F-15 SG は運用コストが安く済む一方でより効果的な、優れた戦闘機混成団を RSAF に提供するであろう。今後、RSAF はこうした高度なプラットフォームを RSAF の戦闘システムへ統合して、その潜在力を十分に活用することに重点を置く。全面的に実用化されれば、これらの統合型能力は我が軍のセンサーと砲手を全て効果的にネットワーク化することにより、RSAF は監視能力を高め、あらゆる空の脅威に対してより迅速に応答し、より効果的に対処できるようになる」と指摘した(“The RSAF's next flight”, *Pioneer*, September 2010, p.11)。

同じ記事に次のような記述もある「IKC2 は全ての SAF 要員及びプラットフォームの統合に向けた 3 軍の取り組みである。全面的に実用化されれば、IKC2 の能力により SAF は一体として作戦行動が可能になる。例えば、陸軍司令官は地上の標的を制圧する任務に対して空軍が最適な選択肢であれば、シンガポール共和国空軍 (RSAF) の資産を活用することができる」(Ibid.)。

¹⁶ “The next lap of RSN's transformation”, *Pioneer*, July 2010, p.16.

¹⁷ MINDEF News, “Speech by Deputy Prime Minister and Minister for Defense Teo Chee Hean at the Committee of Supply Debate 2010”, 5 March 2010.

テオ国防相はさらに「こうした小型 UAV の開発には技術的に非常に骨が折れたが、それはサブシステムも全て小型、軽量でありながら頑丈かつ信頼性の高いものでなければならぬからである。DSO の技術者は極めて厳しい予算配分の範囲内で、明瞭なビデオ画像を提供できる十分な解像度、指向精度、安定化機能を備えた光学装置を含めた設計に取り組みなければならなかった。ビデオ画像をリアルタイムで使用者に送り返すための、小型通信データリンクを組み込まなければならなかった。小型 UAV は、有意義なミッション時間と航続距離に対応できる優秀なエンジンと大容量バッテリーも必要とし、また重要な問題が1つあり、即ち戦場や極めて過酷な条件での離着陸の繰り返しに耐えられる強度を持たねばならなかった」と述べた¹⁸。

次いでテオ国防相はこう公言した「広範な試験運用と進化を経て、設計は練り直され、スカイブレード III を生産する ST エンジニアリング社へ移管された。ST エンジニアリング社は次いで生産モデルの開発に成功し、この UAV は現在、陸軍に配備されている。この成功を受け、UAV の研究開発は、旅団レベルでの使用を目指すスカイブレード IV という名の 60 kg クラスの戦術 UAV の開発と並行して継続中である」¹⁹。

独自の研究開発に加え、SAF は 2010 年にシコルスキー S-70B 海軍ヘリコプターと 2 隻目の RSS スウォーズマンというスウェーデン製アーチャー級潜水艦の調達及び納入を通じ、装備を強化した。

おわりに

シンガポールは 1965 年に突如マレーシアから分離独立して無防備な状態に置かれて以来、大きな進歩を遂げてきた。この都市国家は世界的金融危機を上手く切り抜けてきた。シンガポールは戦略的資産である水の自給率向上に向け、また国防のためのハイテク兵器システムの一部を独自に開発する上で必要な物的手段、技術力、先見の明を持っている。

シンガポールは東アジアにおけるパワーシフトの渦中であって、隣国や大国の軍隊と良好な関係を熱心に育んできた。「既知の未知」は国内、地域、或いは全地球的なテロ行為がそうであると考えられ、そうした行為が一時的、局所的な騒乱を生み出す可能性はあるが、シンガポールの主権と存続を脅かすほどではない。ほぼ間違いなく、この都市国家は短い歴史の中で最も安全な状態に

¹⁸ Ibid.

¹⁹ Ibid.

46 アジア太平洋諸国の安全保障上の課題と国防部門への影響

ある。近隣諸国、特にマレーシアとの関係改善、超大国米国やアジアの大国との良好な関係、多大な抑止力を持つ第三世代のネットワーク化された戦力へ向けた SAF の絶え間ない革新、地域での人道的災害救援活動における SAF の優秀さ、そしてアデン湾とアフガニスタンにおける多国間協力といった実績を踏まえ、シンガポールは静かなる自信に満ち溢れているようである。